**溶岩洞穴、樹型、胎内**

富士山から流れ出た溶岩は、溶岩洞穴や樹型を形成することがありました。溶岩洞穴は溶岩流内部の空洞です。熱い溶岩の通り道は、その周囲の物質がより急速に冷却するのに伴って硬い外殻を作り出します。噴火が終わると、この溶岩はこの殻を通って流れ続け、後に筒状の空洞を残します。一方、樹型は溶岩が森林を通って流れる際、木々の幹の周りに形成します。この木は燃え尽きますが、溶岩が冷え固まるとその大まかな形状の型が岩の中に穴として残ります。樹型の中には複数の木が共に溶岩に飲み込まれてできたものもあり、こういった樹型はより大きく、形状も複雑です。溶岩洞穴と樹型のどちらも、溶岩の冷え固まり方によっては内部の岩壁に肋骨のように見える長い襞を持つことがあります。

 富士講の巡礼者は、このような樹型を人体内部のような穴という意味の「胎内穴」と呼んでいました。胎内穴は富士山の体内に入り生まれ変わることができる神秘の場所と考えられていました。『冨士山體内巡之図』と題された五雲亭貞秀（1807-1879）による浮世絵には、巡礼者たちが襞に覆われた狭い船津胎内を巡り、乳房のような形の岩から滴る（母乳に見立てられた）水を飲んだり、洞穴内に安置された仏像を拝んだりする姿が描かれています。

**再生と子宝**

霊的な再生の手段としての胎内巡りは、巡礼者たちがその霊力を持ち帰る方法を求めたほど篤く信仰されていました。巡礼者の中には、洞穴底面の砂を大切に紙に包んだり、紙片や布片を岩から滴る「乳」に浸したりしたものもいました。江戸に持ち帰られたこのような品々は、安産祈願のお守りや妊婦の腹巻として利用されました。